

美容院における相互行為分析

小濱 智子

0. はじめに

多くの人々が2ヶ月に1度くらいの頻度で美容院に行き、何か特異な場であるという感覚の中でカット等をしてもらい、店をあとにしている。この何か特異な場という感覚、つまり美容院らしさは一体どのように達成されているのだろうか。本論では主に身体配置、道具から美容院という場がどのように客、美容師といった参与者たちによって共同的に達成されているのかをみていく。

1. 調査概要

7月28日、N市O町にあるK美容院にご協力いただき、ビデオ撮影を行った。このK美容院は、2人の美容師—うち1人は店長（先生と呼ばれている）—でお店を運営している。普段は2、3人の客が同じ時間に居合わせるという具合である。ビデオ撮影を行った日も、お客さんが1人いて、カット等が行われていた。撮影は調査者と調査協力者の2人を客として、まず調査協力者Mがカットを（1時間程度）、Mのカット終了後に調査者Kがヘアカラー等（2時間半程度）を、と1人ずつの作業を続けて撮っていくという形式をとった。ビデオカメラは、接写用にDV（デジタルビデオ）：カメラ4、鏡像（鏡上の視線をとらえるため）をとらえるカメラ2、ワイドコンバージョンレンズを取り付けたカメラ3、の3つを設置した。（資料1参照）本論で用いるデータは、調査協力者Mのカット作業のものである。カットは、洗髪→カット→洗髪→カット（微調整）といった工程で行われた。

2. データ分析

2-1. 反射的インタラクション

美容院で最も特異なものは、参与者たちの身体の配置である（図1）。通常、数人で何かやりとりするとき、視線を直接交わすことのできる対面的位置を参与者たちはとる（図2）。これは、例えば会話であれば日常的に、「相手の方を向いて話をする」というルールがあるからである。もちろん日常場面でも、テレビを見るときには相手の方を見て会話をしなくてもそのことがルール違反として認識されることはない。

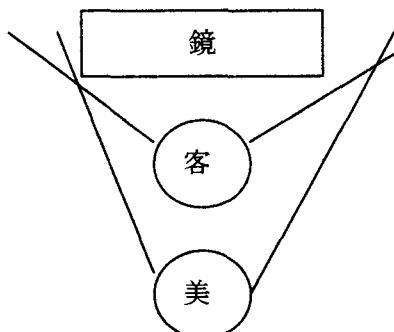


図1 美容院の身体配置
(視界の重ね合わせ関係)

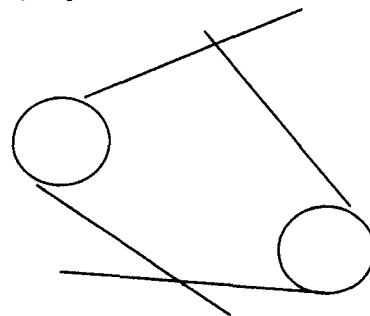


図2 二者間会話の身体配置
(向き合い関係)

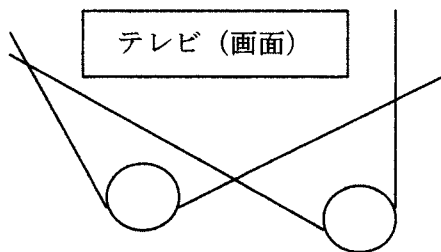


図3 テレビ視聴時の身体配置
(並見関係)

テレビ視聴の場合の身体配置(図3)と同様の形態をとるビデオゲームについて、水川(1997)は「インタラクションの二重性」を分析している。水川によると、ビデオゲームが行われる場面では、2つのインタラクションが異なった場面で同時に行われている。1つは、プレイヤーが操作する画面情報(キャラクターなど)による画面上のインタラクションであり、参与者の身体を全く離れた場所(画面上)に自分の関与が反映されるというもの。もう1つは、場面の参与者(プレイヤー同士やプレイヤーと周りの人)の身体のインタラクションである。(次頁の図4)

一方、美容院においては、鏡上写像インタラクションと実像インタラクションといった2つのインタラクションをみることができる。実像のインタラクションは写像によって、客は直接美容師を見ることなく、美容師の動きを知ることができる。そしてまた、美容師も客の行動・反応を知ることができる。同じようにビデオゲームにおいても、画面上で相手のキャラクターの動きから相手の行動を知ることができる。しかし、美容院でのように、自分が相手の行動を見ていることを、鏡上写像によって相手が確認できるインタラクションの重なり合いはない。このようなインタラクションの重なり合いは、視界の重ね合わせ相互確認関係にある身体配置によって可能となっている。(次頁の図5)

ところで、このようなインタラクションの重なり合いから、各々のインタラクションは一見同じように思えるが、そうではない。例えば、写像の客'がこの写像の中で作品として扱われていれば、一方で実像においては客が写像をみながら作品(髪)に対して要求や訂正をしていくことによって共同制作者となる。もちろん、「写像の客'(鏡の中の客)＝作品」、「実像の客(美容師の前にいる客)＝共同制作者」といつもなっているわけではない。各々が「作品」となるか「共同制作者」となるかは、各々の場面のコンテクストによる(＝インデックス性)のである。

このような、美容院における鏡上写像のインタラクションと実像インタラクションの2つのインタラクションを水川の「インタラクションの二重性」に対し、インタラクションそのものに重なりがあることから、「反射的インタラクション」と呼ぶことにする。

この「反射的インタラクション」の下で、具体的にどのようなことが参与者たちによって達成されているのかをデータを示しながら以下の節でみていくことにする。

に視線を向けるということは、向けられた対象や活動への関与が焦点化することであるので、極力、明らかな視線を向けないよう提示するために用いる手段の一つが、視線を宙に向けるという動作である。これは、自分の身体になされているということに無関心であるという表示であり、この動作によって身体に診察が行われているということが焦点化されずすむのである。しかしまた患者は、診察に無関心であることを表示する一方で、なされていることに注意を向けている」(C.Heath:1986、高山:1995:109)。

つまり、医療場面において患者は診察時に視線を宙に向けることは、無関心であることを示すことになる。そしてそのことによって、自分の身体に診察が行われていることが焦点化されないようにしているのである。

ここでは、①対象に視線を向けないようにすることが無関心であることの表示となること、またそうして②無関心を示すことで自分の身体が焦点化されないようにしている、ということが示されている。

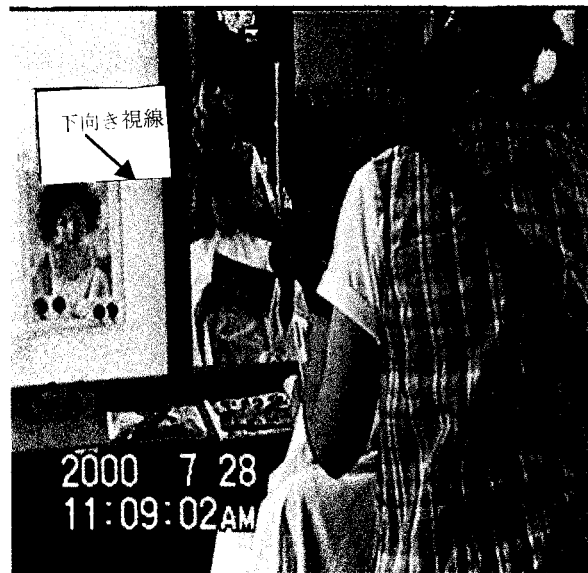
これと同じようなことが場面1でもいえる。医療場面と同様、美容院においては身体(髪)が焦点化される。客(M)は雑誌を読むことで視線を鏡からそらし、カットという場面に無関心であることを示している。また、そうすることで自らの身体(髪)が焦点化されないようにしているのである。

また一方で、客は鏡を時折見ている。鏡を見ることは雑誌を見ることとの対比によって、浮き彫りにされ、鏡をみることがチェックとして参加者たちに理解可能になっている。

このように、雑誌は見ないこと(=無関心)を示すものであると同時に、鏡をみることをチェックとして示す道具となっている。そして、このように雑誌に関わって2種の状態があることが、その双方をそれぞれ「無関心」と「(髪の)チェック」として、参加者たちに理解可能なものになっているのである。



画像1 雑誌による「チェック」の提示
2000.7.28 (11:09:01) カメラ④



画像2 雑誌を読むことによる「無関心」の提示
2000.7.28 (11:09:02) カメラ④

2-3. 美容院という場の終了

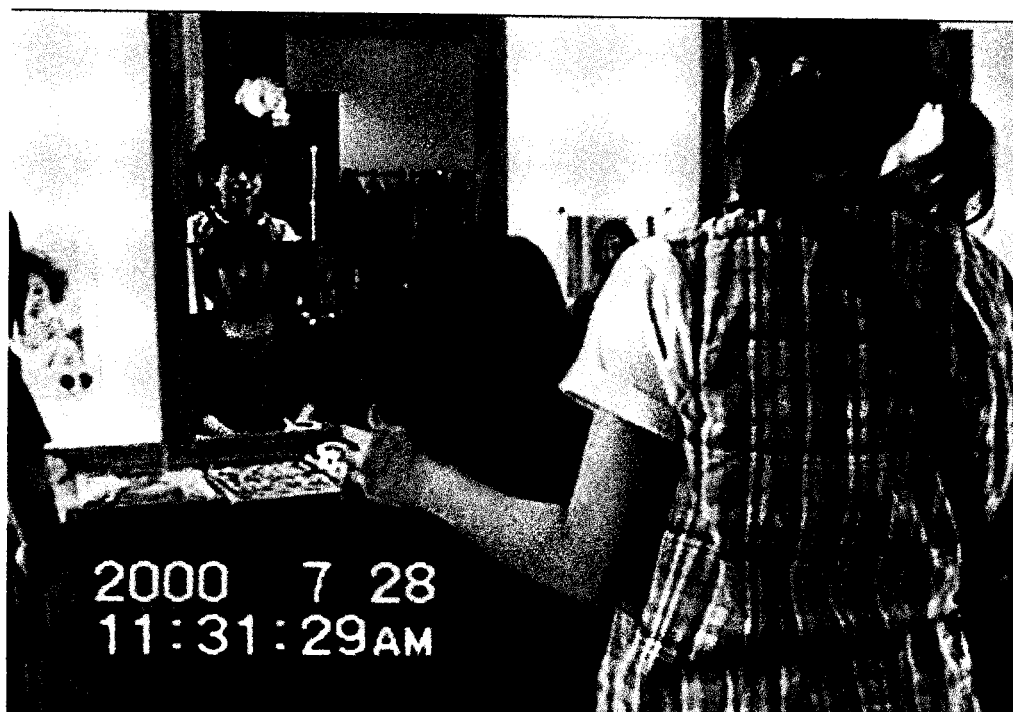
会話の終了について分析した E・シュエグロフと H・サックスによると、適切な終了を達

まず、3行目で、美容師 H は客にかけていたタオルを外している。タオルを外すということは、もうそれ以上カットなどを行うことがないことを示している。つまり、タオルを外すという動作は作業の終了を提案する「先終了句となる可能性のある句」なのである。そのことを客 M も理解して鏡を見、次に手鏡で確認をとる準備体勢に入っている。

また、5行目で H が手鏡を広げ、「後ろこんな感じで」と発話している (①)。それに対して、客 M は「はい」と言いながら2回うなずいている (②)。この部分だけ考えてみると、H の「後ろこんな感じで」の後には、「よろしいですか?」といった承認を求めるもの、あるいは「仕上げました。」という報告が続くということが、予測できる。どちらにしろ、この H の発話は、カットという一つの作業の終了の提示となっている。つまり、H の「後ろこんな感じで」は「先終了句となる可能性のある句」である。その H の発話を受けて、M は「はい」と2回うなずくことで、H の発話を承認したことを示している。しかし、ここでこの場面は終了していない。M の②のうなずきに対し、H はうなずいている (③)。この H のうなずき③は何を意味しているのか。二通り考えられる。まず、「本当によいのか?」という、先の M の応答に対して、もう一度確認をしているもの。そして、先の M の応答を自分が理解したことを示すもの。前者の場合、④の M のうなずきは、③の「本当によいのか?」という問いに対して、「それでいい。」と了承しており、⑤で同時にうなずくことで最終確認をお互いにしたことを示したことになる。後者の場合、④のうなずきもまた、この場合の③と同様であり、⑤で同時にうなずき、最終確認していることになる。

しかし、ここでも場面はまだ終了していない。5・6行目で互いに最終確認をしたが、H は髪型を調整している (=話題の再開)。そして H はうなずき、自分は今以上何もするべきことはないことを提示する。これに対する M の応答 (うなずきや「はい」) はない。その前に、M がもうそれでいいことは十分確認し合っているので、示す必要はない。H の椅子を回しながらの「お疲れ様でした」という発話に対し M は応答はしていないが、鏡から視線を外し、椅子の回転に身を任せ、降りる準備をすることが H の「お疲れ様でした」を理解していることを示している。

また、5・6行目では1節で述べた、視界の重ね合わせ関係の身体配置が関係している。手鏡を広げ、H が鏡を見、M が手鏡を見ているとき、視界の重ね合わせができない (次頁の画像 3)。そのため、確認に必要な情報が視線からは得られにくいので、それを補うための音声 (「後ろこんな感じで」「はい」) が用いられる。その次の③④⑤のうなずきに会話が伴わないのは、両者とも鏡に志向しており、視界の重ね合わせが再び可能になったため、確認の情報は視線から十分得られるので、音声がなくともこと足りるのである。



画像3 手鏡でのチェック。視界の重ね合わせができていない。

2000.7.28 (11:31:29) カメラ④

このように、作業の終了部分は、タオルを外すというふるまいや「後ろこんな感じで」というような発話、うなずきなどといった先終了句が繰り返される。そして、最終的に「お疲れ様でした」とそれを理解した行動という最終交換を交わすことによって終了部分は組織化されているのである。しかし、発話やうなずきなどのふるまいだけでこの終了部分が組織化されているというわけではない。うなずきは鏡を通して確認されているし、椅子の回転もまた最終交換の一部となっている。つまり、(終了部分に限らず、多くの場面においても) 視界の重ね合わせ関係にある美容院特有の身体配置、さらに発話とふるまい、道具などによって終了部分は組織化されているのである。⁽¹⁾

2-4. 美容師同士の共同作業

美容院では、はさみやブラシ、ドライヤー、椅子、ローラーボードといった様々な道具が、様々な状況に応じて用いられている。なかでも鏡は常に用いられ、他の道具と連携し、様々な工程で作業をスムーズに行うことを可能にする道具である。鏡は、カットやパーマ、ブローの状態を美容師が全体像をみるためや客の表情をうかがったりするために用いられ、客と会話をする上で視線が交わされる場であったり、仕事仲間の様子を作業中にも確認できるものとして機能している。



画像4 背後をTが通っている
2000.7.28 (11:23:09) カメラ④



画像5 HがTを鏡上で捉える
2000.7.28 (11:23:10) カメラ④



画像6 Hが左に移動し、Tが右に移動。
2000.7.28 (11:23:13) カメラ④



画像7 2人でドライヤーをかける
2000.7.28 (11:23:19) カメラ④

このように、この場面では、2つの道具—鏡とドライヤー—によって、Tの行動がHに理解可能となり、ドライヤーかけの作業を1人から2人の作業へとスムーズに移行しているのである。

3. 終わりに

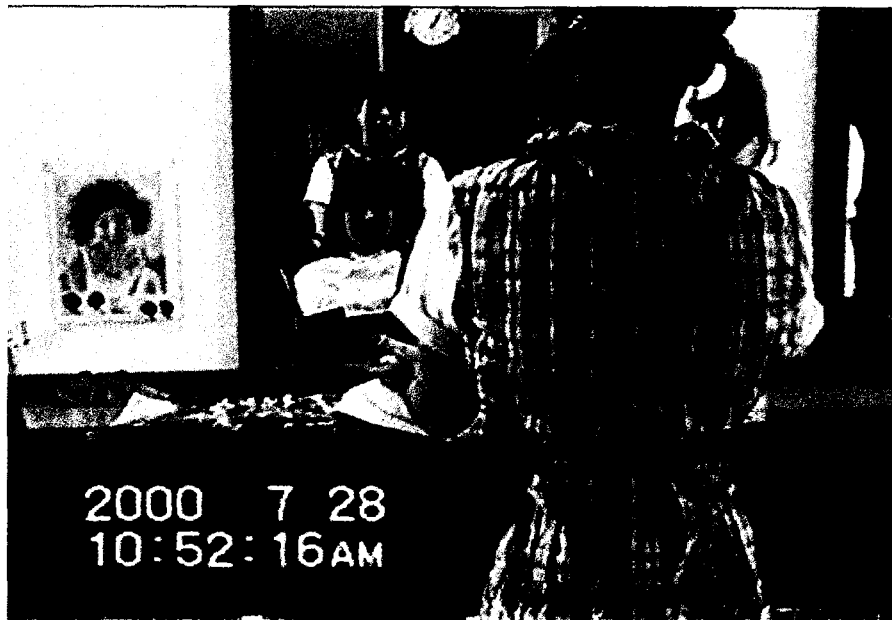
本論では、視界の重ね合い相互確認関係にある身体配置が美容院特有であり、そのこと

がさまざまな場面において有意味になっていること、道具がある行為をきわだたせ、その行為を参加者に理解可能にし、場面場面をスムーズに達成することを可能にしていること、これらをデータを示しながら述べてきた。しかし、道具と同じように、身体配置はそれ自身だけで成り立っているのではない。身体配置自体もまた、場面や道具、そして参加者といった各々のコンテキストの中で組織化されているのである。

注

(1) どのようにして終了部分が組織化しているのかという問題は、どのようにして開始部分が組織化されているかという問題と深く結びついている。

場面のスタート時点においては、「視界の重ね合わせの相互確認」の相互確認から、2人のインタラクションは始まっている（画像8参照）。詳細は別稿を記したい。



画像8 「視界の重ね合わせの相互確認」の相互確認
2000.7.28 (10:52:16) カメラ④

謝辞

ビデオ撮影を行うにあたって、撮影に協力していただいた K 美容院関係者の方々には心より感謝したい。また、指導教官である樫田先生、明治学院大学の中村和生氏、そして、ゼミメンバーには、ご教示を頂いた。こうしたご教示がなければこのゼミ論は書けなかっただろう。重ねてお礼を申し上げる。

トランスクリプト記号一覧

。	句点：語尾の音が下がって 区切りがついたことを示す。	斜下	：斜下を見ている。
【 】	括弧：参加者の行動を示す。	下	：下を見ている。
()	：不明。	鏡 (M)	：鏡の中の M。
nod	：うなずき。	鏡 (H)	：鏡の中の H。
hhh	：笑い。	カタログ	：カタログ。
H：美容師		雑誌	：雑誌。
M：客		鏡	：鏡。
T：美容師(経営者)		手鏡	：手鏡。
		髪	：Mの髪を直接見て いる。
...	ピリオド：動作の始まりかけを示す	下	：下を見ている。
,,,	：動作が終わりかけていることを示す	コンセント	：コンセント。
		?	：視線がどこを向い ているのか不明。

参考文献

- 荒木絹子、1998、「居酒屋厨房における相互行為分析」、『エスノメソドロジーと福祉・医療・性（平成10年度 榎田ゼミナール・ゼミ論集）』、徳島大学総合科学部：27-38。
- Giddens, Anthony, 藤田弘夫、1998、「体系的社會理論家としてのアーヴィン・ゴフマン」、『社會理論と現代社會学』、青木書店。
- Schglöf, E. A. and Sacks, Harvey, 1972, "Opening up closing" *Semiotica* 7 : 289-327 = 1995、北澤裕・西阪仰編「会話はどのように終了されるのか」、G. サーサス他『日常性の解剖学』、マルジュ社：175-241。
- 上野直樹、1999、『仕事の中での学習』、東京大学出版会。
- 榎田美雄、1996、「119番通話研究の意義について」、『現代社會理論研究』6：113-120。
- 高山啓子・行岡哲男、1997、「道具と身体の空間的秩序」、山崎敬一・西阪仰編、1997、『語る身体・見る身体』、ハーベスト社。
- 出口陽子、1998、「空間の社会的認識—動物病院における診察室の相互行為分析」、『エスノメソドロジーと福祉・医療・性（平成10年度 榎田ゼミナール・ゼミ論集）』、徳島大学総合科学部：85-96。
- 西阪仰、1992a、「行為出来事の相互行為的構成」、『社會学評論』154：2-18。
- 西阪仰、1992b、「参与フレームの身体的組織化」、『社會学評論』169：58-73。
- 西阪仰、1997a、『相互行為分析という視点』、金子書房。
- 西阪仰、1997b、「会話分析になにができるか—社会秩序の問題をめぐって」、奥村隆編『社會学になにができるか』、八千代出版：115-154。
- 水川喜文、1997、「ビデオゲームのある風景—インタラクションの中のデザイン—」、山崎敬一・西阪仰編、『語る身体・見る身体』、ハーベスト社。
- 山崎敬一・上野直樹・山崎晶子・高山啓子・上谷香陽・浦野茂・中村和生・岡田光弘、1995、「CSCW と相互行為分析—テクノロジーのエスノメソドロジー—」、『現代社會理論研究』5：93-126。

資料1 : K 美容院見取り図 (ビデオ撮影時の配置)

